

国立大学法人 お茶の水女子大学

(審査・評価委員の所見)

- ・今回の提案は、ジェンダード・イノベーションをより前面に掲げて、女性研究者、女性リーダーの育成を新学部構想の中で推進しようとしている点で高く評価できる。民間資金という裁量権の高い資金を次世代の女性支援にどのように振り向け続けることが可能か、注目したい。
- ・昨年に比べ産学連携活動に向けての施策を強化しており、評価できる。ムーンショット計画への参入、組織対組織の産学連携等、具体的な提案となっている。
- ・世界的に注目されつつあるジェンダード・イノベーションについての研究所を設立し、他大学と幅広い分野（工学、AI、人文系等）で連携を図っている点が評価できる。
- ・共同研究費の絶対額などでは他大学にまだ劣るものの、お茶の水女子大学が産学連携強化に動いているという点は他の大学への刺激にもなると思われ、本事業に採択する意義がある。
- ・綿密な計画を作り着実に成果を出してきている。工学系新学部の設立後がさらに期待される。

国立大学法人 浜松医科大学

(審査・評価委員の所見)

・浜松医科大学は、学内のリソースの把握、長期的視野からの改革の方向性、そして何よりも医工連携というアドバンテージを生かす取り組みを重ねている。現在の問題は、静岡大学との連携が果たして進むのかに絞られる。中部地域のスタートアップエコシステム拠点との連携を重視し、アントレプレナー教育という切り口で静岡大学との関係を進展させるべきかと考える。

・学長のリーダーシップのもと、産学連携・イノベーション創出を活性化するための「産学官連携部門の外部法人化」の試みには大いに賛同する。今まで強化してきたメディカルイノベーションを中心に産学連携を強化しようとしている点が評価できる。

・地域連携の拠点である「浜松ウエルネス・ラボ」、新たに設置する「医工連携教育研究センター」の発展と成功には、外部化する「産学官連携実施法人」の役割がきわめて大きい。静岡大学との統合も見据えながら、今後の我が国の地域医療・ウエルネス・ヘルスケアの一大中心地となることを期待する。

・医工連携教育センターを立ち上げ、スタートアップも含めたイノベーション教育を充実させようとしている点が評価できる。

・地域産業の振興を強く意識している点が評価できる。

・目指す方向性ははっきりしているが、それに対するマネージメントに若干の不安がある。特にこれまでの単科大学としての運営と、静岡大学との共同運営にはギャップがあると思われる。

・外部収入計画について、令和4年度から5年度への増加予定が令和3年度までに比べ大幅に増加する予定を立てているが、実現性に若干の不安がある。

国立大学法人 東海国立大学機構 名古屋大学

(審査・評価委員の所見)

- ・名古屋大学はここ数年の国立大学改革を牽引する大学であり、その期待に応える活動をされてきたことは高く評価したい。一方で、東海国立大学機構の目指すガバナンスの統一化やそこから生まれるシナジー効果がこの資金でどのようにさらに発展するのか、発展させたいと考えているのか、をさらに注視していきたい。
- ・大学の将来ビジョン実現に向けての、当事業の交付金の位置付け、用途、効果が、きわめて分かりやすく説得力をもって伝わってきた。総長の優れたリーダーシップにより、民間資金獲得等による大学経営の安定化・発展への意識改革が浸透している証左である。
- ・東海国立大学機構および大学連合体による地域創生ビジョンは、地域の構造変革を起こす中核拠点としての新しい大学モデルである。他大学の見本となるべく成果を上げつつ、先頭を走り続けて欲しい。
- ・数々の産学連携プログラムを実施する中で、産学連携体制マネージメントを高い次元で実現している。東海国立大学機構として、より高いレベルでの産学連携マネージメントを期待したい。
- ・博士課程学生の支援も先駆的に進めており、評価できる。
- ・産学連携活動の長い経験を活かした組織運営ができるようになってきた。
- ・TIIの黒字化が次の課題。
- ・OI機構の業績は上がっているのか懸念を持つ。今後のがんばりに期待したい。

国立大学法人 北海道大学

(審査・評価委員の所見)

- ・学長のリーダーシップが明示的に強調されている点は高く評価したい。北海道という世界的なブランドを背負った地域の中心となる国立大学には極めて大きな期待がかかっている。そのブランドの役割は、文部科学省の所管だけにとどまるものではないので、さらなる多角的な資金へのアプローチを期待する。
- ・北大の重要な使命を「地域に密着した基幹総合大学の新しい大学モデル像の提示」と定め、多くの画期的な取組みを実施している点が評価できる。
- ・産学連携活動をより多面的に強化するために創設した「未来共創推進本部」は、上記の新しい大学モデル像の提示の観点からもきわめて重要である。「北海道の強みを活かすコンソーシアム型オープンイノベーションの推進」に向けての、今後の活動に注目したい。
- ・農学、工学含め多くのリソースを持ち、ポテンシャルは十分あると理解している。
- ・マネージメントについても新総長の下、改革を行おうとする意識は高い。
- ・計画として出された民間獲得額目標は 17%増（12.4 億円）と高いもので、実現性もあると思われる。
- ・事業を広げすぎてコストが上昇していないか懸念がある。不採算部門の整理も必要と考える。
- ・外部資金獲得増に向けた産学連携マネージメントはまだ発展途上と思われる。より一層の工夫を求めたい。